



第 52 回 (平成 22 年 8 月 11 日) 定例会の講演要旨

戦場になった樺太、シベリア抑留、手稲音頭について

(社) 全国樺太連盟顧問・樺太短歌代表 西村巖氏

日本国民なら皆さん同じ気持ちと思いますが、特に北海道人(ドサンコ)にとっては、樺太は身近に有る島で、稚内の宗谷岬から北へ 43k 海峡の向こうにかすむのは思い遥かな樺太の島影、望郷の思いはつるばかり。

西村さんが大正 15 年に札幌で生まれて生後まもなく、父親の仕事の関係で樺太に移住させて現地の小学校卒業、昭和 19 年北海中学卒業後樺太に戻り樺太庁へ出向、翌 20 年現役入隊、終戦と同時に抑留されて昭和 25 年に北海道に戻るまで四半世紀を樺太で過ごしたカラフトコで有るので、望郷の思いはひとしおと察します。

かって樺太は 1855 年日露両国が調印した日魯通好条約で樺太は混住の地となったが、日本人とロシア人との紛争が絶えなかった。

日本とロシアが再三の会談を重ねた結果、1875 年(明治 8 年)樺太、千島交換条約で日本が樺太を放棄する代償として、ロシアから千島列島を譲り受け、その後日露戦争の結果、ポーツマス条約により北緯 50 度以南の南樺太が日本の領土となった。昭和 20 年 8 月 9 日、ソ連軍が北緯 50 度の国境線を侵攻した。その後の結果は軍民挙って悲惨な戦闘や逃避行が始まり、真岡郵便局交換手 9 名の乙女自決、恵須取大平炭鉱病院看護婦 6 名の方自決(始めて知った)緊急疎開中ソ連潜水艦に撃沈大破による犠牲者 1,988 名三船殉難小笠丸、泰東丸、新興丸、昭和 20 年 8 月 22 日ソ連潜水艦 L12 号と L19 号二隻の潜水艦は留萌上陸作戦支援のため留萌港偵察と日本軍艦への攻撃指令を受けていた。

この事件をめぐっては現在もロシア側は正式には認めていない。

当時の軍部は南方戦線を重視し、樺太の防備を軽視したのは、日ソ中立条約を締結しているので安心したのか……。ヒットラードイツが降伏後は当然ソ連がシベリア方面へ兵力を回す事を考えなかったか。ヤルタ会談、ポツダム宣言の内容を詳細に把握する情報網が有れば状況も変わっていたのかと思います。日本の外交下手は当時も今も変わっていない。ソ連に対しての軍備はなぜノモハン事件戦闘 3 ヶ月で 17,000 名犠牲に関東軍はソ連の機械化部隊に壊滅の悲惨と教訓を生かせなかったのか。西村さんの資料によると、飛行機ゼロ、戦車ゼロとその他の装備も貧弱で、素手で戦ってるのと同じで、日本人は良く頑張ったと思います。

もしも、樺太全島が日本領で有ったなら悲惨な戦闘や逃避行を回避できなかったか。日本は 1922 年(大正 11 年)に成立したソビエト社会主義共和国連邦との国交予備交渉のため 1923 年(大正 12 年)1 月末に、後藤新平の招きで来日したアドルフヨッフエ極東代表と 6 月 28 日から 12 次に渡って交渉したが合意にいたらず決裂。この交渉でソ連は樺太北部(北緯 50 度以北)を 10 億ドルで売却する提案をしたが日本は拒否した。現在オハ近郊にて天然ガス石油も採掘している。将来の事も考えて購入していれば……。当時も現在も日本の事なかれ主義内外政策は変わってない様に思えるが、各地域を購入していたアメリカは 1867 年(慶応 3 年)帝政ロシアよりアラスカを購入、当時のアラスカは原住民が住まず、極寒不毛の地と見られ、ロシアは手放したと思われるが、現実には鉱物、木材、石油、水産物等資源の宝庫で有る。まさに、アメリカは先見の明有り。

話はだいぶ横にそれましたが、戦後 65 年経過した今もロシアとの間には北方領土が未解決で残っており、早期の解決を期待しています。今次大戦で地上戦を行なったのは唯一沖縄だけだったと国会で間違った答弁を繰り返していたが、平成 22 年に至り樺太も地上戦を行なったと認めた。

その樺太で悲惨な体験をした西村さんの生々しいお話を聞き、さらに詳細な資料も頂き今後役に役立てたいと思います。4 年間の抑留を終え昭和 25 年に帰国され、道庁土木部の技師として勤められ昭和 57 年に退職後、全国樺太連盟事務局長として活躍、さらに抑留体験を生かし、樺太短歌代表として詠まれ、又郷土のため手稲音頭を作詞したりと、とても 85 才とは思えないお元気で活躍されております。現在南方の戦争を素材にした記録や小説は有っても北方物は少ないので、今後も人々のため樺太関係の語り部として伝えて下さい。

(文責:三國勲)



「手稲山口村のよもやまばなし」

手稲本町 平沢伸二氏



手稲山口地域(一部星置地区も含めながら)の歴史事象を明治のむかしから順追って整理した資料(歴史年表)を提供してくれました。手稲区内の山口という一つの地域を拾い出すと、このようにたくさんのできごとがあるということを教えてくれました。平佐さんが生まれ育ったふるさとでしっかり見聞きしてきた出来事でしょう。特に昭和に入って戦中・戦後のひとつひとつの思い出にはかなり強いものがあるかと思います。ただ誰しも同じことですが、明治、大正期の古い頃のことなどや、故郷を離れてからの様子については、確かな記録や資料に頼らざるを得ないわけです。

今回の提供年表を今後私たちが参考にさせて頂くに当たって、平佐さんも恐らく利用したであろう下記資料を比較照合しながら使わせてもらいましょう。

- ・ 『山口開基百年史』(昭和 54 年刊、特に P194 ~ 年表)
- ・ 『手稲歴史年表』(平成 22 年刊)
- ・ 『手稲町誌上下』(昭和 43 年刊)

よもやまばなしとはいえ、幾つかの貴重な話題提供されました。一層の資料の掘り起こしが大事かと思われま

す。手稲が誇る札幌市指定有形文化財第 1 号のバツタ塚辺りはかつて放牧地でした。平佐さんが子供の頃からバツタの成虫や卵を埋めたるうね状の土地を良く記憶しているようです。平佐家の牧場だったのでしょ

う。祖父の代に手放したとか……。

明治 25 年に手稲村で 3 番目に開放された山口小学校、上級学校に進学された卒業生も多いとか。山口を理解する上で人物史も大事かと思

います。

手稲村として、ヒュッテを模しての丸太作りの旧駅舎、手稲町役場庁舎、等々古い建物が次々と消えていった。私たちの地域での物足りなさを感じつつ、古建築の再生など貴重な提言だった気がします。

昭和 22 年の新制中学校開校時、小学校に併置された間借り状態の教育について話されました。当時の星置小学校(現手稲西小学校)に併置の手稲中学校星置分校に通われたのでしょ

う。この後の独立校手稲西中学校同窓会のご苦労談も伝えてもらいました。

この外にも、山口本通りへのバス乗り入れ、小樽と札幌の境をなす清川(スミカワ)山口村開祖宮崎源右衛門、前田候、トド山……等々でした。

いつの日か、『手稲歴史年表』改訂の折り参考資料にしたいものです。

(文責: 茂内義雄)

次回の予定

次回(10月13日)は、会員発表で、吉田寛義氏の「手稲村の農地改革」、伊澤敏幸氏の「手稲の自然保護」を学習する予定です。

… 会場変更 …

今回は、会場を「第 1 会議室」(2階)に変更します。